

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	學窓時事及慨言
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 64: 105-107
Issue date	1898-03-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5090
Right	

を得たり。

式終りを告げて、雜煮會となる、皆健啖精勤の賞を博したるは、或は北寮某氏の八椀二十四個ならんか。

校 報

一月三十一日

元非職教授

佐久間信恭

在官六年以上ニテ退官ニ付年俸月三ヶ月分下賜

二月四日

囑托

中嶋 春海

寄宿者物品監守者及物品取扱主任ヲ免ズ

二月五日

囑托

岩田 靜夫

物品檢閲委員ヲ命ズ

二月七日

鈴木千代吉

當校圖書測量科ノ講師ヲ囑托シ爲報酬一ヶ月金八拾圓贈與

非職教授

佐久間信恭

依願免本官

二月十四日

講師

下山 秀久

願ニ依リ囑托ヲ解ク

二月十八日

岩森 彌助

當校物理學科實驗授業ヲ囑托シ爲報酬一ヶ月金貳拾五圓贈與

三月一日

囑托

鈴木千代吉

右池田ト改姓

雜 報

三月十四日

囑托 岩田 靜夫

金監心得ヲ命ズ

左の四中學校は今回新たに我校と連絡を通したり

福島縣會津尋常中學校(二日)

愛媛縣第一尋常中學校(全)

新潟縣尋常中學校(全)

大分縣中津尋常中學校(三日)

學窓時事及慨言

硯友會

本月十三日紅葉が岡にて硯友會を開

く會するもの拾有七名校長閣下の御臨席を辱ふし頗る盛大なりき即席の詩歌並に連歌の草稿積んで寸餘に及ぶ一々稼堂先生の清風を仰ぎ其朱線を得たるものは載せて本誌の文苑欄にあり其他講談あり餘興ありて春日の永さを忘る而して當日又もや校長閣下及び稼堂先生より過多の御寄附を戴きたれば一同大に感謝し一献を傾けて歸る此の日幹事の改撰を行ひたるに中熊直喜君當撰し快く引き受けられたり本會の隆盛期して待つべし多望々々(幹事役)

大日本佛教青年會の會員諸氏は、二月二十

五日市内明善寺に於て、赤松連城氏の來熊を機とし、佛教演說會を開き、『三無無差別』の講話ありたるが、本月二日、其督信者花陵會の諸氏に、三年坂會堂に於て、演說會を催し、大日本福音同盟會、東京派出員平岩恒保氏の『基督の愛國心』の講話ありたりといふ。

過激過激 過激なるかな、人生過激が尤も妙なり、姑息彌縫の手段は無能力者の所爲なり。我々校風に於て革命を、革新し、矯正し、撲滅すべき事あらば直前驀進すべきなり。かの淫靡浮華の徒に一日の懲罰を怠るは一日の癡癡を來すものなり、二日三日終に旬日を越ふれば挽回の道なきに至らん。

梓弓ひきて放てよ鵬鵠

とても醒むへき世にまゐらねは

惡を見て 惡と感せず、又惡と知りても見逃すものは、其身已に惡に與するものなり。曩日、二三の事、世評に上りたり、而えて一人も立て是を責むるものなかりき。君子は人の惡を責めずといふか。
悲いかな 吾人不才、諸君の推選によりて茲

に一年の日月を経たれども、「として見るべきものなし。思ふに、後任の諸士は、悉く慷慨義烈の俊士、必ず刮目見るべきものと信ず。校風の發揮は只一に諸士の鼓吹を期す。

◎ 擱筆の 辭

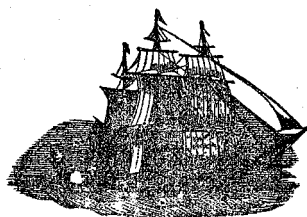
生等乏を以て本誌編輯の任に當り、蕪雜疎策の文辭を以て、本紙の尊敬を汚せしこと爰に一年、今や、筆硯を後續の英儒に譲らんとするに臨み、一言所思を陳べて擱筆の辭となさんと欲す、生等思ふに、夫れ言を立つるには、先づ其地歩を占むるを要す、君臣、師弟、治者被治者、各其立言の態を異にす、吾人學生の境界にありては、立言自から莊重謹嚴に、浮華ならず、放漫ならず、其本分禮讓を體せざるべからず、今や、師道漸く乱れ、學生往々、立言の態を敗り、放言狂語して、以て快とし、之を稱えて氣焰となすものあり、生等魯鈍といへども、自ら此徒と異らんことを期せり、さりながら、生等五人亦各把持する所あり、所信を執りて變せざる限り、時に紙上に衝突矛盾ありたらんを恐る、然れども、生等思ふに、多數の筆に成り、必ずしも一定の主張主義を要せざるべき吾

誌にありては、勢衝突も矛盾もあるべきにあらずや、衝突矛盾はなほ可なり、生等は時に吾誌面の統一を欲しもありたらんを怒る、思ふに、吾人が立言の礎は、吾校學生の一員たるにあり、爲に吾校の脉面に於て、牽制掣肘の已を得ざるものありて、直言直寫を欲しことあるも、これ已を得ざるに出でたるものにして、好で曲筆の醜を演じたるにあらざるとを諒せよ、以上は生等が竊に自ら立言の基礎と定めたるどころにして、過去一年間、少しく自ら務めたりと信ずる所なり、然れども、生等固より操觚の資にあらず、錦繡の美を織り成し、吾誌をして華を文壇に擅にすると能はず、諸子が雄篇鉅作を挾別えて、雄を詞壇に競はしむると能はざりまは、深く生等が職責に對して忤怩たる所なり、幸に部長閣下の懇切なる誘導と、會員諸子の熱心なる補翼とにより、爰に任を全ふし、安んじて筆硯を新委員に譲るを得たるは、生等が深謝に堪へざる所なり、

明治三十一年三月二十日筆硯を洗ひ舊稿を焼くに臨みて

石田 昇

雑誌



吉 九 一 昌
 楠 田 義 任
 戸 次 正
 藤 村 作

部